多読のすすめ

NPO 法人日本語多読研究会

日本財団 The Nippon Foundation 助成事業

この小冊子は、NPO多言語多読の前身、日本語多読研究会が2008年に日本財団の助成をうけて制作したものです。2019年の無料公開にあたり、情報が古くなった巻末の多読用図書リストと奥付は削除しました。最新の情報は、NPO多言語多読のウェブサイトでご確認ください。

tadoku.org/japanese

＜目次＞

◆はじめに　1

◆「多読のすすめ」・酒井邦秀　3

◆多読実践報告
①自然で大量のインプット・宮島京子　5
②教師は日本語の本への水先案内人・深田みのり　9
③「初めて日本語の本を読んだ！」・松田緑　13
④リラックスして日本語に触れられる場所～オランダ多読教室・小松和恵　16
⑤多読が教えてくれたこと・粟野真紀子　20

◆座談会～「多読授業について話そう！」
（酒井邦秀、松田緑、川本かず子、宮島京子、粟野真紀子）　25

はじめに

日本語多読研究会が「多読」を目指して「レベル別読みもの」の開発を始めてから5年半が過ぎました。開発の動機は、とにかく学習者が読める読みものがないということ、日本語の力をつけるには、やさしいものから徐々に難しいものへとどんどん読んでいくことが有効だと考えたことに尽きます。

学習者向けの読みものが必要なことは間違いない、でもそれをどうやって作ればいいのか――英語のレベル別読みものを唯一のお手本にした試行錯誤が始まりました。しかし、できるだけ学習者の立場に立って、読みやすいとはどういうことか、読めないのはどうしてか、何が読めないのかを探りながらの試行錯誤は、非常に楽しく興味深い作業でもありました。リライトや創作作品が 30 近くできた頃、国内外の学習者や先生方から「ほしい」というメールをたくさんいただいたことも大きな励みになりました。そうした要望に応えて、せっせと印刷し、頒布してきた数は3000部を遙かに超えます。そして、2006年10月、ついに出版へ。

現在、完成したレベル別読みものは、『レベル別日本語多読ライブラリー「にほんごよむよむ文庫」』（アスク出版）――以下、「よむよむ文庫」――の50作、当研究会が独自に頒布している読みもの10作、合計60作になります。おかげさまで、海外でも出版されるなど、レベル別読みものは歓迎されているという手応えを感じています。

しかし、これらは「多読」をするための読みものですから、まだまだ数は足りません。いかに学習者に興味を持ってもらえるもの、面白いものを書くかは、常に私たちに突きつけられている課題です。

ところが、この肝心の「多読」が、まだまだ理解を得られていないようです。せっかく学校に購入された「よむよむ文庫」が、ひっそりどこかの棚に置かれていたり、「多読」に使われず、クラス全体で一緒に読む「読解教材」として使われたり。辞書を引き引き、「精読」している学習者もいることでしょう。「よむよむ文庫」のVol.2が出版されたのを機に書店巡りをしたとき、「もっといろいろな話を書きたい」と、ある日本語教育関係の書店の方に言ったところ、「え？まだ作るんですか？」と驚かれたこともあります。

そこで、今回、私たちの考える「多読」についてみなさんに知っていただこうと、日本財団の助成をいただき、本冊子を作成しました。内容を紹介する前に、まず、簡単に私たちの提案する「多読」について紹介します。

私たちの考える「多読」は、酒井邦秀氏がP3-6で書いている英語の100万語多読を踏襲し、日本語教育に応用したものです。とにかくやさしいものから徐々に難しいものへと大量に読み、やがて一般向けの本が読めるようになることを目指します。けっして、「精読」を大量にこなすことではありません。大量にインプットするため、やさしいレベルのものから、辞書を引かず、わからない言葉は飛ばして、何よりも楽しみながら読んでいくのです。そして、進まなくなっ

たら、思い切ってその本は止める。

では、多読授業はどんなふうに行われるのでしょうか。

強調したいのは、クラス全体で一つのものを読むのではないということです。学習者が何人であれ、一人一人好きな本を手に取り、自分のペースで黙々と読んでいきます。

主体はあくまでも学習者一人一人。教師の役割は、それぞれが気持ちよく読んでいける環境作りです。学習者の興味に合った本を用意したり、飛ばし読みのコツをうまくわからせたり、あまり進んでいない学習者を見つけて、その本を止めさせたり・・・。

思い思いの本を手にした学習者はやがて本の世界に入っていきます。教室がしーんと静まり返り、気持ちのよい時間が流れます。1 冊読んだ後は、読んだ本の名前を記録し、書きたければ一言感想を書く。書きたくなければ次の本へ。理解度チェックもしなければ、テストもしません。そんな調子で続けていくと、学習者は半年で数十冊、多い人で 100 冊ぐらいの本を読んでしまいます。

どうでしょう？なんとなく授業風景が浮かんだでしょうか？それとも想像もつかないでしょうか？こんな授業にどんな意味があるのか、疑問に思われるでしょうか？

昨年、うれしいことに、このような多読授業の実践校が新たにいくつか誕生しました。そこで、今回、それらの学校の先生方に多読授業の実践報告を書いていただきました。まずは、その貴重な実践報告やその中に登場する学習者の感想をじっくりお読みいただき、多読の教室で何が起こっているのかを頭に思い描いてみてください。そして、座談会では、さらに具体的な教師の生の声をお聞きください。巻末には、多読授業の手がかりとなるよう多読向け図書リストも掲載しました。

この冊子を読むことで、多読の「核」を感じとっていただけたら幸いです。さらに、多読授業をやってみようと思われたら、ぜひご一報を。多読用図書の制作や発掘は、まだまだ発展途上です。多くの先生方と協力し合って、多読向け図書リストを充実させ、学習者が多読しやすい環境を作っていけたら望外の喜びです。

最後に、授業の感想を提供し、授業を通して実にさまざまなことを教えてくれた学習者に感謝の意を表したいと思います。みなさん、どうもありがとうございました。

2008 年 7 月末日

NPO 法人日本語多読研究会

粟野真紀子

「多読」のすすめ

電気通信大学准教授・NPO 法人日本語多読研究会
酒井邦秀

近年、多読は次第に外国語学習者の関心を呼ぶものになってきました。手前味噌ながら、この傾向は2001 年に私も関わって多読のインターネット・サイトが設置され、2002 年に私の書いた『快読 100 万語！～ペーパーバックへの道』（ちくま学芸文庫）が出版されて以来のことだろうと思われます。とはいえ、まだまだ英語の多読がどんなものか、どんな成果を挙げているのか、日本語獲得にどう関係があるのか、ご存じない方も多いと思います。この小文でごくかいつまんだ紹介を試みるものであります。

多読は昔から「外国語学習の切り札」のように言われてきたようです。けれども私が『快読 100 万語』で具体的な方法を提案するまでは、多読はいわば高嶺の花で、よほどの力を蓄えた「上級者」のみに許される秘技だったと言えるでしょう。インターネットを通じてまったくの初心者にまで多読が広まった最大の理由は、同書で多読 3 原則を提案し、たくさんのやさしい読みものを紹介したことによると思われます。そこで、この小文ではまず多読 3 原則（＊日本語多読では 4 原則）とやさしい読みものについて紹介します。それからこの 2 つが揃うことで英語獲得にどんなことが起きたかをお話しし、最後に多読が日本語教育に示唆するところについてお話しします。

●多読 3 原則とやさしい読みもの

私が『快読 100 万語』で提案した多読はこれまでの外国語学習の常識を根底から覆すものだったようで、大方の英語の先生にはひどく嫌われてしまいました。みなさんは次の 3 原則にどう反応なさるでしょう。

1．辞書は引かない。
2．わからないところは飛ばす。
3．合わないと思ったら途中でもどんどんやめる。

どの 1 つをとっても、正確さや勤勉さ、真面目さを金科玉条とする日本の教育観や学習観を逆撫ですると思われます。多読 3 原則は「正確に読む」ことよりも「楽しく読む」ことを勧めていて、これまでの語学学習の大前提を取り払ってしまいます。

そこでこの 3 原則を聞いたたいていの英語の先生はひどく反発します。「辞書を引かずに英文が読めるわけがない」とか「わからないところを飛ばしていたらいつまでたってもわからないままになる」とか「わからなくても無理やり挑戦することで力がつくのだ」というわけです。

どれも、これまでの語学学習の常識からはまっとうな反論のように思われます。

また、やさしいリーダーにも強い反発があります。というのは多読を始める場合にみなさんに勧める本は（幼児でも、大学生でも、社会人でも）文字のほとんどない絵本だからです。「英文の正確な読解をせずに、絵で話を理解していて英語の学習になるわけがない」というわけです。そう反発する人たちに、電気通信大学の学生は日本の漫画の英語版を授業中に何十冊も読むと言ったら、ますますこいつには何を言っても無駄と、匙を投げることでしょう。

●「多読」の成果

いちいちの反論にさらに反論するには紙幅に限りがあるので、多読 3 原則とやさしい本の威力を示す実例を紹介しましょう。およそ 6 年前に普及活動をはじめて以来、それまで読まなかったペーパーバック、洋書の朗読を楽しむようになった人はおそらく 1000 人をはるかに越えると思われます。（SSS の掲示板をご覧ください→www.seg.co.jp/sss/）そうした「成功者」の中には小学校入学前に「多読で英検準 2 級に合格した」（母親の報告）という子どもから、「大学生のときに英検 3 級を受けて不合格だったけれど、多聴と多読で今は 1 日 10 時間も仕事で英語を話している」という社会人、「英語が不得意で英語の入試のない大学を受験したけれど、今はペーパーバックを楽しんでいる」という主婦など、文字通り枚挙に暇がありません。

この人たちは正確さを求めません。単語の意味も全部わからなくても平気、長い文がどういう構造になっているかも気にしません。もちろん日本語に訳せるかどうかなどは意識にありません。ただ目の前に展開する物語を楽しむことに集中します。そして以前に「わからないところを飛ばしながら」読んだ本を再読して、「あ、くっきりわかるようになっている！」と喜びの声を挙げます。試験の点数で力がついたかどうかを確認するのではなく、楽しみの度合いで進歩を実感するのです。

●日本語教育への応用

英語はたしかに「やさしい本」がたくさんあり、入手もほかの言語にくらべて容易です。レベル別読みものも充実しています。しかし、日本語には、これがほとんどありません。日本語多読研究会などが果敢に試みている「レベル別読みもの」の開発普及は、今後さらに多読の成果を充実させ、普及させるために不可欠だと思われます。

ただ、幸い、日本語には漫画、アニメ、テレビドラマといった強力な多聴多読素材があります。英語多読の初期（たかだか 6 年前！）には音声素材や映像素材の入手はむずかしかったのですが、インターネットや再生機器の普及で、日本語の多聴多読も非常に楽になってきました。

レベル別読みもの、漫画、アニメ、テレビドラマなどの素材を、「正確さよりは楽しさ」を求めて大量に吸収すれば、日本語の獲得は世界中の人にとって楽しく楽なものになるはずです。ぜひ、みなさんの学生さんに多読の楽しさを知ってもらいたいと思います。

（英語の多読多聴に関するブログ→http://tadoku.org/）

＜多読実践報告①＞

自然で大量のインプット

アジア学生文化協会日本語コース・宮島京子

■　初めての「多読」授業

この１年ほどの間に、何回か多読授業をやってみていますが、今回は昨年私が初めて行った授業について紹介したいと思います。授業を始める前には「本を読むだけ」という授業が本当に成立するのかと不安に思っていた一方で、もしうまくいかなかったら形を変えて、今までやっていたような物語や小説、エッセイなどを毎回一篇ずつ取り上げる授業に切り替えようとも考えていました。「何がなんでも 10 回多読を」と考えずに「まず試してみよう」と気楽に始めたことが結果的には良かったかもしれません。「多読」は今までに経験のないものですから、どうすればいいのかわからないことだらけです。あまり難しく考えずにできる範囲で条件を整えて、まずは始めてみたほうが良さそうです。この時は以下のような形で授業を行いました。

●クラス	アジア学生文化協会（ＡＢＫ）日本語コース 選択科目『本を読もう』クラス
●期　　間	2007 年 5 月～7 月
●授業時間	週 1 回（45 分×2 時間）10 週
●対　　象	中級の５クラスから受講を希望した台湾、香港、中国、韓国、タイ、インドネシア、シンガポールなど学生
●人　　数	前半）27 人　後半）17 人
●使用図書	『日本語多読ライブラリー』　75 冊 その他の本　20 冊～30 冊

もともとこの選択科目の授業については学校の方から「何か『読む』授業を」というオーダーがあり、授業の準備をしている時に JET 日本語学校の多読授業についての記事（「月刊日本語」2007 年 4 月号）に出会いました。「本を読む」授業！「本を読むだけ」の授業！…そんなものがあるのかとまず驚いて、それから自分でもぜひやってみたいと思いました。また、その前の年に出版された『日本語多読ライブラリー』の本についても、これまでにない魅力的な教材だと感じながらどう使っていいかわからないでいました。この本を作ったのがこの JET の先生方だということもこの記事で知って、ますます多読の授業に惹かれました。

私が自分でも多読をやってみたいと思ったのは、日本語を教える中で「教えることの限界」とでもいうものを漠然と感じていたからです。教室の授業が、学生の進歩には必ずしもまっすぐつながっていきません。特に中級以上になると学生は初級の時のような「毎日上手になって

いる」という実感が持ちにくくなります。一生懸命勉強してテストではいい点を取っているのに「日本語が上手になった」とは感じられない。学校での勉強と並行した形で「自然で、そして大量の日本語のインプット」とでもいうものがどうしても必要だと感じていました。その「インプット」の一つとして本を読むことを勧め、推薦本のリストを渡したりもしてもいましたが、なかなかうまくいきません。「本を読みたい」という意識は持ってもらえても、読み続けることにはつながりません。今考えるとそのリストの本は難しすぎました。学生の「本を読んでみたい」という気持ちに応えられるような読書指導法を私は知らなかったわけです。

「多読」の授業についての記事は、長年私が抱えていたこういう悩みに答えをくれるものでした。やさしいものから読むことで読書が継続していく、読む力がついていく、そういう授業を私もやってみたいと記事を読んで考えました。

■　授業の実際

○　授業を始める前に

「多読」の授業を始めようとするとまず問題になるのが本です。授業の出発点になる『多読ライブラリー』は学校のもの、自分のものだけでは足りず他からも借り受けて、結局 75 冊用意しました。それに多読研究会の推薦本リストの本を中心に図書館で借り、自分の本、学校にあった本を合わせて毎回 20～30 冊程度の一般書を用意していました。

本を集める過程で多読研究会の粟野先生と連絡を取ることができ、授業見学をさせてもらうことになったのですが、この時見学できたことでなんとか初めての授業を形にすることができたのだと思います。多読について多少は調べ理屈ではわかったつもりでいましたが、キーである「やさしい本から読む」ということも、どの程度の「やさしさ」なのか、学生がそれにどんな反応をするか、実際は私の想像とずいぶん違っていました。教室に置く本のバリエーション、先生の働きかけ方、記録の取り方など、「本を読む授業」が授業として成り立つための原則のようなものが、この時に初めてわかったと思います。何よりも、教室全体がし～んとなって一人一人が本に集中しているあの独特の雰囲気を直接体験して、何を目指せばいいのか目標が定まりました。

○　授業記録から

毎回授業中に取っていたメモから、10 回の授業を簡単に紹介します。

1 回目）5、6 人で 1 グループになるように机を配置。日本語の読書経験についてアンケートに記入してもらう。「多読」について、四つのルール、読書記録について、説明。グループ毎に『多読ライブラリー』のレベル 1、2 を中心に置いて好きなものをどんどん取って読んでもらう。途中でやさしい絵本も数冊ずつ追加。読み始めてすぐに、教室内がしーんと静まり返り 27 人全員が本に集中。「読むだけ」の授業が私の場合にも成立するのだろうかという不安はここで払拭される。

2 回目）『多読ライブラリー』の本と、前回と違う絵本を用意。授業の後半に時間を取ってこの

2 回で読んだ本、自分の読み方を振り返ってもらう。頭の中で翻訳をしていないか、わからない言葉があった時はどうしているかなど問いかけて、「多読」の読み方、4 つのルールの持つ意味を意識し、実感してもらうようにする。本を読んでいる時の自分の頭の動きは無意識なものなので、ここで意識して頭を切り換えてもらいたいと考えた。

3 回目～）ここからは通常の机の並べ方に戻し、好きな本を選び、好きな場所で読んでもらう。少しずつ読む本、読み方に差が出てくる。教室の一番後ろの隅に椅子を持って行き後ろを向いて自分の世界を作って読みふける人。字だけの本は国でも読まないからと『ドラえもん』だけをずっと読み続ける人。手に取る本を次々読み飛ばしすぐに隣の人に話しかける人。1 冊終わるごとに「先生、おもしろかった～」とうれしそうに報告に来る人。勉強のためにと難しい本を選びがちな人…。

10 回目）最後に読書記録を読み返してどんな本を読んできたか振り返り、このクラスの感想を書いてもらう。今後も本を読み続けることを勧めて授業を終了。全10回に出席した人たちは5、6 回目ぐらいから、それぞれの読み方や本の選び方が定まってきた。無理して難しい本を読んだり、自分の読み方や読んでいる本のレベルを人と比べてみたりすることの無意味さは、回を重ねるごとに自然にわかってくるようで、後半は自分のペースで読む人が増えた。

■　学生の反応

一番多かった感想は「日本語で本が読めてうれしかった」というものでした。今まで読みたい気持ちはあっても機会がなかったり、読んですぐ挫折してしまったりした人には、何冊もの本を読み終えることができたという達成感がうれしかったようです。「日本語の本を読んで自分が笑ったり驚いたり感動したりできるなんて、想像していなかった」というううれしい感想もありました。

2 番目に多かったのが多読のやり方に対する評価です。「難しい本を読まなくてもいいと言われてびっくりした」「嫌になったら途中で止めてもいいと言われたのがうれしかった」「こんなやさしい本を読んでも意味がないと正直言って最初は思ったが、やさしい本だから読み続けることができたと思う」といった感想はこちらの意図が伝わったことがわかってうれしいものでした。「日本の昔話がこんなにおもしろいとは」「子どものための絵本も意外におもしろい」と本の内容の楽しさ自体を書いた人も多く、また「読めるという自信がついたので、これからも本を読み続けたい」という感想を書いた人も何人もいました。概ね今回の授業の意図がわかって、読むことの楽しさを味わってくれたようです。

■　授業をしてみて～感想と課題

①　4 つのルールの意味

「やさしい本から読む」「辞書は使わない」「わからないところは飛ばす」「進まなくなったらやめる」という多読のルールは、授業を始めてみると納得がいきます。結局、本に引き込まれていくと、辞書を引いたり、メモを取ったりすることはじゃまにしか思えなくなりますし、やさしい本を読めばその必要はないことがわかります。一方で、「進まなくなったらやめる」というルールを守ってもらうのは難しく感じました。「難しいものをがんばって読むことが勉強」という意識はなかなか抜けず、勉強熱心な優等生ほど「途中でやめてもいいよ」と言っても、「大丈夫」とがんばり続けていました。こういう学生も含めて、本を読んでいる様子をよく見ていい形でアドバイスできるようになることが、今後の一番の課題です。

② 本探し

抵抗なく読むことができ、「日本語の本を読むことができた！」という達成感を与えてくれる『多読ライブラリー』の本は、「多読」の核になります。これがないと挫折感ばかり味わわせてしまって「多読」は続かないと思います。問題はそれ以後の本です。学生の反応を見ながら、この1年間図書館や書店で本を探し続けていますが、読みやすくしかも興味を持ってもらえる本を探し当てるのは難題です。多読授業をする学校が増えて先生同士情報交換できれば、多読に使える本のリストもさらに充実すると思います。

③ 読み続けてもらうために

5回、10回の授業ではなかなか「読解力が伸びた」というところまではいきません。選択科目での授業内ではまず、読み方の意識を変えてもらうこと、読めるという自信を持ってもらうことまでです。本当に多読が力を発揮して学生が「読む力がついた」と感じるためには、授業以外の時間も読み続けてもらう必要があります。そのためには、読みたい学生がどんどん借りることができるように図書を充実させて、借りやすいシステムも作る必要があります。これは大きな目標です。

■ 英語多読体験

初めての多読授業が終わってから1ヶ月ほどしたところで、私自身も英語多読を始めました。大学受験以来ほとんど英語とは接点のない生活をしていましたし、始めてみるまでは日本語学校の学生と同じように本を読むことに抵抗がありました。でも始めてみると「こんなに楽しい世界があったのか！」とすっかりはまり込み、結局半年で英語多読の一つの区切りとなる 100万語を読み、その後2ヶ月ほど休んで、現在までに500冊近くの本で130万語読み終えて、言葉が増えたこと、読む力が伸びたことが実感できています。

英語多読をやってみて良かったのは、外国語で本を読む時の自分の心や頭の動きを客観的に見ることができた点です。小さい字が並んでいる本から受ける圧迫感、理解の助けになる挿絵のうれしさ、英語学習者のために書かれたレベル別読みものと絵本や児童書の読みやすさの違い、多読ルールの意味、そういったことが自分の体験を通してわかり、今自分の多読の授業の中でとても役に立っています。

＜多読実践報告②＞

教師は日本語の本への水先案内人

東京日本語文化学校・深田みのり

◆　習いにくく教えにくい「読み」の授業

初級を終え、中級に進んで以降伸び悩む学習者をよく見ます。その理由のひとつに「読むこと」でのつまずきが考えられます。教科書や試験問題などで読解力が求められるにもかかわらず一向に実力が上がらなくて、苦手意識ばかりが募ってしまう人が少なくありません。文字がぎっしり並んでいるのを見るだけで嫌になってしまう。これを何とかしたいと思う一方、正直なところ指導のしづらさを感じているのも読解の授業です。まず、一人一人読む速度が違いますし、「話す・書く・聴く」と比べ、「読む」は学習者がなぜ間違えたのか知りたくても、本当のところは一人一人の頭の中をめくってみないとわからないような不透明感があります。読解中心の教科書で文章構造の説明や精読を丁寧に行い、日本語能力試験や日本留学試験の読解問題で数をこなしても、苦手意識を持った人たちの根本解決にはなっていないという感が拭えません。

◆　多読授業見学――百聞は一見にしかず！

読む力を伸ばすいい方法はないものか。そんなことを考えていた折、日本語多読研究会作成のレベル別読みものの存在を知りました。すぐに読み切れるボリュームで、日本語学習者用にリライトされ、全ての漢字にふりがながついている。これは副教材としていろいろと使えるだろうと早速学校で購入しました。でも、これの本当の生かし方を知ったのは買ってから数年後、粟野先生の多読授業を見学する機会を得てからです。

多読授業はまさに“百聞は一見にしかず”。「ただ読ませるだけで授業が成立するのか？　教師は何をするのか？」という疑問がどこかへ吹っ飛んでしまいました。しーんとした教室で熱心に日本語の字面を追っている学生たちの表情を見て、まず知らされたのは“読むというのはとても能動的な行為なのだ”ということ。また、机を回りながら、時々学生たちに話しかけたり、感想を聞いたりする粟野先生と学生たちの関係も新鮮でした。教える・教わるではなく、本を媒介として交流する仲間と言ったらいいでしょうか。そして、読みに集中している学生たちの素の表情や姿勢のいろいろ。それを見ているだけで飽きないものがあり、「この授業をやってみたい」と思いました。

このように、多読授業を始めるきっかけは、「読む力を云々」ではなく「面白そうだからやってみたい」だったのが正直なところです。でも、授業を始めるにあたって『教室で読む英語 100 万語』（大修館書店）で酒井先生の多読指南に触れておいたのは大事なことでした。日頃の読解授業への疑問と見学で多読授業に魅せられた理由をつなげてもらいました。「手引として酒井先生の本を 1 冊読んでおくといい」と勧めてくれた多読授業実践の先輩、宮島さんに感謝したい気持ちです。

◆　東日文での授業のやり方

○授業形態　科目選択授業（45 分×週１回×３ヶ月）
　　７～８種類の授業から自由選択（毎週同じ科目を選ばなくてもよい）

○レベル　午前の部＝中級～上級
　　午後の部＝中級前期

○参加人数　平均 10 数人

○本の種類　「よむよむ文庫」、絵本、マンガ、小説、児童書、エッセイ、詩、雑誌、、図鑑、写真集など

○本の数　100～200 冊（１回の授業で教室に持っていく数）

○図書予算　約 3000 円／月

○本の管理　１階の学生サロンに貸出用図書コーナーを設置。普通の本棚以外に、多読授業のために持ち運び可能なコンテナも購入。ジャンルやレベル別に収納。（↑写真参照）

○授業の流れ　①授業前に多読用図書を入れたコンテナ３～４個を教室に運ぶ。
②授業開始。自主的にあるいは教師のアドバイスによって本選び。初参加の学生は読書傾向アンケートに記入→多読授業について説明→「よむよむ文庫」レベル１からスタート→1 冊読み終わる毎に読書記録表に一言感想を記入
③全学生が読書に集中して静まり返る。教師は各学生の記録表を配布後、一人一人の様子を観察したり話しかけたり。新着本は最初に紹介する。
④終了時、貸出希望者に貸出カード配布。読書記録表と図書の回収。

◆　学生たちの声

多読授業を 3～9 ヶ月間継続受講した学生を対象に、修了前の最終授業でアンケートを行いました。「多読授業をどう思ったか」という問いに次のような回答が返ってきました。

まず日本語力について、「読むスピードが速くなった」「本を読むのが苦手だったが、好きになってきた」「漢字がたくさんある文でも嫌じゃなくなった」「マンガの表現に慣れた」「読み書きが進歩しているのがわかってうれしい」「読解力がついてきた。大学案内を読むのが楽になった」「もともと本が好きだったが、外国語の本にも知らないうちに夢中になっている自分に驚いた」「“日本語がまだまだなので本を読むのは無理”という恐怖心がなくなった」「日本語と親しくなった」読むことに対する苦手意識の克服、語彙の習得、読解力の向上などに有効であったと実感する声をたくさんもらいました。

また、その他の感想として、「自由な雰囲気が好き」「静かに落ち着いて本を読める、図書館みたいな雰囲気がいい」「共感できる作品やお気に入りの作家に出会えてうれしい」

日本語力向上だけでなく、知的充足や精神的安定をもたらす場としても学生たちに受け入れられていたことがわかり、これは私にとって予想外の発見であり大きな喜びでした。通常のク

ラス授業とは異なった、「自分のペースで、のびのびと、あるいはじっくりと、日本語と向き合う時間と空間」を求めている学生が結構いるのだということ。そして、彼らにその場を提供できたことを本当に嬉しく思いました。

◆　多読の１年を振りかえって

昨夏の多読授業初日。集まった学生たちを前に「これは学校で初めてやる実験的な授業なんだけど、つきあってくれる？」と言った時、彼らの目が輝いたことを覚えています。次に、多読のルールとして「みんな違うペースでいい」「わからない言葉は飛ばす」「途中でパスしてＯＫ」「最初は簡単すぎるものから読む」を説明して、集中できるなら音楽を聴いてもかまわないと言うと、へーっと驚いたり、こちらの目を見て「ほんとに？」というような嬉しそうな目をしたり。多読授業の主旨が伝わったことがわかる大切な瞬間です。このスイッチが切り替わるような一瞬が好きで、以来ずっとこの導入法を続けています。

多読授業を始めた頃に不思議だったのは、学生から「本を選んでください」とよく言われることでした。こちらにすればそんなことをしたら教師の押し付けにならないかと心配だったのですが、「よむよむ文庫」は与えるとほとんどの学生が完読し、他の本についても、合わない時にはうまい具合に「先生、これパス」と言ってくれるので、こちらも安心して勧めるようになりました。たしかに彼らの側に立ってみれば、日本語で本を読んでみたいと思ってせっかく本屋に行っても、漢字だらけの本がずらりと並ぶ書棚から求める１冊を探し当てるのは容易なことではないに違いありません。本屋の入り口で途方にくれてしまうでしょう。その意味で、読みやすさを保証された数十冊の中から気軽に選べること、そして１冊完読してみることはとても嬉しいことなのだということをはっきり知らされました。また、日本語のレベルすなわち多読のレベルとは限らないこと。本の好みは本当に人それぞれであること。読んでいるところを傍から観察しているだけで、面白いのか、難しいのか、つまらないのか、かなりわかること。ひとつひとつが発見でした。

多読は選択授業のメニューの中では歌や人気ドラマと比べれば地味ですし、何かを沢山読むんだろうとは思ってもどんな授業なのかイメージしにくく、学期の最初から大勢の学生がつめかけるようなことはありません。でもこの１年間、１回の授業につき最低 6 名～最高 20 名が参加しており、ゼロになることはありませんでした。「面白いと聞いて」「評判がいいので」と口コミで後からやってくる参加者がいると「やった！」と思います。また、多読授業に来なくなった学生たちが放課後に図書コーナーで本をちょくちょく借りていたり、廊下でばったり会った時「先生、今これ読ん

でる。オススメ～」と声をかけてきたりすると「卒業おめでとう」という気持ちになります。「日本語で読む世界」のほんの入り口の案内役として、いっとき彼らの伴走をし、その先の広がりへと送り出していくことが多読授業の教師の役目というのが今の私の考えです。

◆　今後の課題

○“橋渡し本”の発掘

まず何をおいても「よむよむ文庫」から一般書への“橋渡しになる本”をもっともっと沢山、様々なジャンルで増やしていくことです。漢字がほどよく混ざっていて、できれば振り仮名がついていて、意味理解の助けになる絵がある、ほどよい文章量の、そして魅力的な内容の本です。

○貸出コーナーの整理と充実

今年度の 4～6 月で見ると、図書コーナーでの貸出冊数と多読授業後に貸し出した冊数の合計は各月 100 冊前後。昨年度の図書コーナーの貸出記録が残っていないため、多読開始以前／以後の貸出状況を数的に比較することができませんが、格段に増えたというのが私を含め図書貸出に関わるスタッフの正直な感想です。多読授業の波及効果でしょうか。“学校に面白い本があって、それを授業で読んだり借りたりできる”という認知が広がっていることは確かです。そこで、授業だけでなく図書コーナーでの本選びの助けになるような工夫をしてみようと考えています。例えば“最近の貸し出し人気本”や“新着本”を掲示してみるとか、読んだ学生の一言感想を参考にポップのようなものを作って本につけてみるとか。

○初級～初中級レベルでの取り組み

選択授業のない初級～初中級クラスでは現在多読をカリキュラムに取り込むことはしていませんが、「よむよむ文庫」に目をとめた初級担当の先生から、教科書テストが早く終わった学生にレベル 1 を読ませたら好評だったという話を聞きました。その後も何人か継続的に借りに来ているそうです。初級から多読を始めるとどんな効果があるのか、日本語のレベルによって面白さの感じ方に違いがあるのかなど、様子を聞いているといろいろ興味が湧きます。

○「読み始める」から「読み続ける」へ

東日文での多読授業は 45 分の自由選択枠なので、これは果たして「多読授業をやっている」と言えるのだろうか「多読のすすめ」程度なのではないか、と時々思います。文章量の多い本は 45 分ではとても読み切れないので、授業後その本を借りていくか、リピーターになっているかが授業成功のバロメーターだと考えています。中には時間つぶしの域を出ないまま去っていく学生もいます。「本を読み始める」から「読み続ける」へ進むために必要なものは何か、探っていきたいです。

多読のことを、私自身まだまだ知りません。その意味でもう一歩深く入るためには「英語多読」をやってみることかなと洋書売り場をちらりと横目で見ています。また、もうひとつの関心事である留学生の心理支援と多読の関係についても考察を続けていきたいところです。

＜実践報告③＞

「初めて日本語の本を読んだ！」

NPO 法人日本語多読研究会・松田　緑

10 年も 15 年も日本に住んでいて、配偶者は日本人。家族とも日本語で会話をしている。そんなお母さんたちが、実は日本語の読み書きができない。そういう人たちが、日本にはたくさんいます。そんな人たちに読み書きを教えるクラスで、多読指導をしています。

「多文化共生センター東京」は、海外から来た子どもたちの学習支援や、外国籍女性の子育て支援などの事業を行っているＮＰＯ法人です。その多文化共生センターが開催する「外国人親クラス」の読み書き指導に日本語多読研究会が関わることになりました。

●カリキュラムの作成

日本語でジョークまで言える外国人親（今回は父親の参加はなかった）の多くが、複雑な日本語表記の壁（特に漢字の壁）に阻まれて、読み書きの世界へ進めないでいます。

「貿易会社に勤めているが、今度配置転換になり、英語だけでは仕事ができなくなった」「スナックに勤めているが、いつまでも若くはないので、昼のパートの仕事に変わりたい」「介護ヘルパーの資格は取れたが、実際に仕事をするとなると日本語の読み書きが必要だ」「子どもの学校からのプリント類が読めなくて困っている」など、受講生たちは、切実な問題を抱えています。

どうすれば、彼女たちを自力で勉強できる地点まで連れて行ってあげられるのか？その答えは問題集やテストではないことだけは、確かです。1 日 20 字、30 字の漢字を教えても、忙しく生活している彼女たちは覚えられませんし、仮に覚えたとしてもそれで自在に日本語の文を読んでいくことなどできるわけもありません。たくさんの本を読む中で場面に結びついたものとして表記（特に漢字）に慣れていくことが、彼女たちにとって唯一の「日本語の文を読めるようになる」方法だと考えました。

2007 年夏の準備講座（３週間９回の短期コース。タイ人３名・アメリカ人１名が参加）を経て週 3 日各 2 時間の授業時間のうち１時間目を漢字指導に、２時間目を多読指導にする、というカリキュラムの大枠ができました。それに基づいて以下のコースが開講されました。

① 2007 年９月 18 日～12 月 14 日（秋コース）火・木・金の週３日各２時間のうち１時間が漢字。1 時間が多読。（受講生）　フィリピン人女性６名・韓国人女性１名（30 代～50 代）。在日歴４年～25 年。

② 2008 年１月８日～３月 18 日（冬コース）火・木は、秋コースと同じ。金の 2 時間目を多読に換えて会話にする。（受講生）　フィリピン人女性４名・韓国人女性１名・タイ人女性１名（30 代～50 代）。うち、フィリピン人女性１名と韓国人女性は秋コースから継続。在日歴４年～25 年。

③ 2008 年４月 15 日～７月 24 日（春コース）時間割は冬コースと同じ。（受講生）　フィリ

ピン人女性５名（20 代～40 代）。在日歴３年～13 年。

●多読授業

まず受講生に多読のやり方と目的を説明します。

――１レベルから読んでほしい。わからない言葉があったら、絵を見るか、少し先まで読んでみる。それでもわからない言葉は、とばす。どうしても気になるのなら先生に聞いてもいい。難しい、つまらないと思ったら、その本はやめる。そうやって、たくさん読むことで、体の中に日本語が溜まっていく。漢字も少しずつ読めるようになっていく――

「辞書を引かない」という多読の原則の１つは、幸い（？）彼女たちが辞書を持っていないため指導が要りませんでした。

今まで日本語の本を読んだことがない人が、ほとんどです。初めこわごわ本を手に取りますが、ページをめくると、「あ、読める！」。ぱっと顔が明るくなります。――そういう人たちが「読める」のが「よむよむ文庫」ですもの――大きい子どものいるお母さんも、女子高生に戻ったかのような「ノリ」で、元気にスタートします。

付属の朗読 CD を聴きながら読んでもいいと言ったので、３分の１ぐらいの人がウォークマンのイヤホーンを耳にしながら読んでいます。３～5 時間目くらいまでで、１レベル 15 冊を読み終えます。市販絵本の「ねずみくんシリーズ」や、「ゆうたくんシリーズ」などを挟みながら、２レベルへ。

日本語は話せるのですが、やはり、発音やイントネーションなどから母国語のクセが抜けない人も多いので、多読の時間の初め５分ほどをシャドウイングにあてました。「よむよむ文庫」についている CD をウォークマンで聴いてもらいます。聴いてから繰り返すのではなく、耳から聞こえる日本語の音を即座に発音することで、日本語らしい日本語を獲得してもらおうというのです。自分なりの発音やイントネーションで長い間暮らしてきた人たちが、それを見直す、いい機会になったようです。

スタートして１ヶ月、13～14 時間目くらいで２レベルを読み終わる人が標準のスピードです。その段階で、もう１度、１レベルに戻って読む人、絵本のやさしいもの（多読図書リスト P.39 参照）を読む人、３レベルへ進む人などいろいろです。１から２レベルまでは、どんどん読めて楽しそうな人がほとんどなのですが、３レベルへ行くとかなり辛くなる人も増えてきます。２＋とか、３－のような読み物がもっとほしいと思いました。また、市販の本は、やさしいものはひらがなばかりで、内容もたわいないものが多く、漢字が混じったものになると、急に文の構造も難しくなります。漢字にふりがなが無い物も多くなります。それら

の本は日本語学習者を意識していないものなので当然ですが、こういうときは「よむよむ文庫」が、あと倍あれば・・・と思いました。（制作、がんばらなくては・・・）

ほとんどの人が、3 ヶ月のコース（約 36 時間）でレベル３を読み終えます。レベル４まで到達する人たちもいました。レベル別読みものは、「よむよむ文庫」と私家版も入れて 60 冊。これに市販の本や漫画を加えて 70 冊～80 冊くらいの本を読んだことになります。在日期間が長いために、聞く・話すという場面では豊富な語彙を持っている人たちです。それが多読では有利に働くのでしょう。日本語学校などで日本語をゼロから「学習」する人たちに比べて、読む速度が格段に上であることに驚かされました。また、コースの初めの頃と比べると、終わり頃には全員、さらに読む速度が上がります。不思議なことに文を書くスピードも速くなります。

●よかったこと

子育てやパートで忙しいお母さんや、お舅さんの世話をしてから出てくる主婦などが、夢中で本を読む姿を見るのが、とにかくうれしいです。日本に来て 10 年、20 年を超えるような人たちが、「初めて日本語の本を読みました」「初めて子どもに日本語の絵本を読んでやることができました」「図書館へ行って本を借りる勇気が出ました」「映画の字幕が少しわかるようになりました」「街の看板やポスターにある字が、図形ではなく意味を持つものとして見えてきました」などと言ってくれるとき、「ああ、よかった！」と思います。

●残念だったこと

１レベルの本を手に取り次々に読んでいく受講生がいました。感想を聞くと「面白いです」と答えます。３時間目には、２レベルの本を他のクラスメートと同じように手に取りました。でも、彼女の様子を見ていると、ページを繰っているのに視線が動かない。表情がない。

読めているときには、受講生のみなさん、実に表情が豊かなのです。かわいそうな「象のトンキー」の話の時には眉をひそめ、「一休さん」では思わず笑顔に、「富士山」では感心して頷いたりします。

能力以上の本を手に取っているにちがいない。プライドを傷つけないように、やさしい絵本などを勧めようと思った矢先、彼女はクラスへ来なくなってしまいました。「多文化共生」の事務室への連絡で「わからない語彙が多くて多読は辛かった」と言っていたそうです。大人は「読めているふり」「わからなくても努力」という方向へいきがち。その時こそ、読めないものはやめる、という多読の原則を思い出してもらわなければなりません。教師としての手当が遅れた！という悔いの残る展開でした。

●成果

３ヶ月でコースが終わるので、成果といっても「自分たちにも日本語の本が読める」という自信をつけてあげられたということぐらいでしょうか。これを足掛かりに、受講したみなさんが、読むこと書くことを少しずつでも続けていってほしいと願っています。

（＊外国人親クラスの多読授業のブログ→ttp://plaza.rakuten.co.jp/tabunkatadoku/）

＜実践報告④＞

リラックスして日本語に触れられる場所～オランダ多読教室

NPO 法人日本語多読研究会・小松和恵

1） 多読教室を始めるまで

日本国内で日本語を教えていた時に、英語学習法としての「多読」を知り、私自身が英語力をつけるため多読を始めてみたところ、「これは一番いい語学の習得方法だ」と実感し、日本語教育にも多読を取り入れたいと思い、「日本語多読研究会」に入会しました。研究会で少しずつレベル別読みものの開発が進む間、その頃の勤務先だった大阪教育大学の日本語の補習授業で学生達に試作品の読みものを読んでもらいました。学生達の反応は予想通りとてもよいもので、「多読」がいかに学習者にストレスを与えず、楽みながら学んでいる言葉に触れ続けさせることが可能かを目の当たりにしました。

2005 年 6 月、夫の仕事の都合でオランダの小さな地方都市アルクマール市に転居し、少しずつオランダ国内の日本語教師と交流を深めていた頃、同年秋に同研究会の粟野真紀子さんから「オランダで多読教室をやってみませんか」と言われました。幸い我が家には小さな子どもが 2 人おり、絵本や子ども向けの本はかなり所有していたので、それらとレベル別読みものを合わせればなんとかなるかもしれないと思いました。しかし、自宅での多読教室ではやはり本が足りないのではという不安、子どもが小さいこともあり私自身の時間が非常に限られることなどから、1 週間に 1 時間の無料教室として始めてみることにしました。問題は学生集めでしたが、ライデン大学の先生に打診してみたところ、日本に留学経験のある社会人のメーリングリストに教室案内を流してくださり、すぐに 4 人が参加することに決まりました。

日本に留学経験がある人たちは、日本にいる間はかなり日本語が上達するけれども、オランダに帰国した後は、日本語力の維持がとても難しいと聞いていました。というのも、オランダには社会人が日本語を学べるところが非常に少なく、あっても入門や初級レベルばかりです。やる気はあっても学べるところがなく、せっかく留学で培った日本語も忘れていく一方だということでした。そこで、私は、「多読なら自分のレベル、ペースで続けていけるので、日本語力のレベルや忙しさに関係なく続けていける。結果的に、少しずつでも日本語に触れ続けることができる」効果を期待しました。

2） 実際の授業

まず始めの日に、「多読のやり方」を説明します。

- ここですることは勉強ではありません。言葉や漢字を覚えようとしなくてもいいのです。
- とにかく、自分が面白いと思う本を読み続けてください。
- わからない言葉があっても、辞書は引かないでください。
- 難しすぎたり面白くなかったりしたら、その本を読むのをやめて他の本を読んでください。

・　リラックスすることが大切だから、コーヒーや紅茶を飲みながら読みましょう。おなかがすいていたらサンドイッチを食べながらでもいい。眠たければ居眠りしてもいい。おしゃべりをしたければ、他の人に迷惑にならない程度なら遠慮なくしゃべりましょう。
・　家で読みたい本があれば、他の人が読む本が足りなくならない程度なら持って帰ってもいいです。次までに読んでこなくても全くかまいません。
・　本を読んだら、「読書記録」つけてください。（日付、本のタイトル、読んだページ数、読むのにかかった時間。書くのがいやでなければ、一言感想。）これは、理解度をはかったりするためのものではなく、これからの多読用読み物の開発のために使います。

そして、実際にどんどん読んでもらいます。どんなにレベルが高い人も、まずはレベル別読みもののレベル１から始めてもらいます。もちろん「面白くなければやめてもいい」のですが、レベル別読みものを「面白くないから」と途中でやめたケースは今までほとんどありません。しばらくして「日本語をどんどん読む」感覚が身についてきたら絵本なども薦めます。絵本は幼児向けに書かれているので、漢字がなくすべてひらがな、大人の学習者には馴染みの全くない言葉遣いで書かれているなど、とても難しいものなので、私は、絵本のテキスト部分を漢字かな混じり、送り仮名付きの文に直して打ち込んだテキストを作り、絵本のテキスト部分と同じくらいの大きさに切り、絵本に直接貼り付けています。かなりの時間と手間がかかるのですが、これはとても喜んで読んでもらえます。

１年間教室を続けたところで、私自身の自由時間が少し増えたので、１週間に３時間の多読教室にしました。１時間で帰ってもいいし、３時間いてもいいというように、時間中の出入りは自由にしました。

多読における教師の役割は、「適切な時期に適切な本を与える」ことにつきます。多読は「日本語の本が読めるんだ！」という自信を与えます。そして、面白い本を読めば、その本について日本語でしゃべりたくなる、楽しくしゃべれる、そして「日本語で会話できる！」という自信にもつながります。「もっともっと読みたい」と、自分から本を手に取るという自発的な態度で日本語に触れ続けることができます。

今までで合計８人のオランダ人が多読教室に来ましたが、そのうち２人は出張で日本やアメリカの大きな都市に行った時に、自分で書店や古本屋に行き日本語の本を買うレベルにまで達しています。これを私は「教師からの離陸」と呼んでいますが、ここまで来ればもうあまり心配する

ことはありません。「この本は読める。この本はまだ難しいな、でも面白そうだからもっと読めるようになったら挑戦してみよう」と、自分で自分のコーチングができるからです。

３）「離陸」まで

参考までに、一番初めに「離陸」したＡさんが１年間に読んだ主な本を挙げてみます。

・「よむよむ文庫」（アスク）、日本語多読研究会作「レベル別読みもの」試作品も含めてすべて
・星新一「きまぐれロボット」のリライトと原文・・・短編をいくつかリライトし、ルビをつけたテキストを作り読んでもらったところ、「オリジナルも読みたい」ということだったので、原文にルビをつけて渡しました。
・福音館書店の科学系の絵本
・マンガ「クレヨンしんちゃん」・・・もともと日本のマンガの大ファンで、フランス語訳を読んでいたので、日本語で読めて大満足。最初は大変そうでしたが、1 年後には「疲れたときにリラックスするために『しんちゃん』を読みます」というくらいになりました。
・神話・・・中高で古典ギリシャ語を習い、ギリシャ神話に親しみがあるので、日本の神話はレベル別読みもの、子どもの読み物、絵本、何でも好んで読みました。
・学研まんが「ひみつシリーズ」・・・「宇宙のひみつ」など、読めた時はとても興奮していました。例えば、有名なアームストロング船長の「これは一人の人間にとっては小さな一歩にすぎないが、人類にとっては偉大な躍進だ」。この言葉が日本語で読めたことに本当に感動した様子でした。
・宮崎駿のアニメのマンガ「魔女の宅急便」「千と千尋の神隠し」「となりのトトロ」など。
・にっぽにあ（平凡社）・・・最初に与えた時に難しすぎて落ち込ませてしまい、私は深く反省したのですが、興味のある記事、読めそうなものだけ少しずつ読んでいたら、いつの間にか読めるようになりました。
・岩波ジュニア新書・・・外国語学習が大好きなＡさんにとって、「ピーター流外国語習得術」や「ピーター流らくらく学習術」が読めたことは大きな喜びで、このころになると、出張先で中高生向けの新書を買うレベルになっていました。

４）課題

指導者側の課題・問題点として、「必要な本をどうやって確保するか」があります。まず、教室を始める前にレベル別読みものの各レベルをきちんと揃え、来る人が決まったらその人たちのレベルを見て、少しずつ自分でテキストを書いてみるのもいいと思います。また、日本に帰国した際に、書店や古本屋などで絵本やマンガなどを少しずつ揃える方法もあります。もう 1 つの問題点は「社会人は忙しい」です。毎回出席する人はほとんどいません。しかし、いくら欠席しても進度に問題ないのが「多読教室」ですから、これは来る人たちにとっては問題点とは言えないのですが、教室運営の点から見ればもちろん問題です。

５）初心者の多読

1 年数ヶ月前に、自宅近くのスーパーマーケットで「日本の方ですか？」と話しかけられました。「日本語を勉強したいんだけど、いいところを知りませんか？」そんなきっかけで来るようになったのが日本語がまったくゼロだった G さんです。それまで来ていた人たちはそれなりに日本語に馴染みがあったので「すぐに多読」で問題なかったのですが、ひらがなが読めない人に「一人で多読」はできません。そこで、「多読的アプローチ」から始めてみることにしました。まず、「ひらがな・カタカナ表」を与えて、文法などは教えず、文字の少ない絵本を一緒に読むことから始めました。例えば、「みんなおなじ　でも　みんなちがう」という絵本です。この絵本には「み・ん・な・お・じ・で・も・ち・が・う」の合計 10 のひらがなしか出てきません。でも、それぞれのページには、種類は同じだけど形が違ういろいろな物の写真があります。例えば、見開きいっぱいに「しょうが」がたくさんあるのです。文字は「みんなおなじ　でも　みんなちがう」だけ。少し説明すればこの絵本のコンセプトは分かります。そして、それぞれのページの写真を楽しみながら「みんなおなじ　でも　みんなちがう」と何回も読めるのです。この絵本を読めば「み・ん・な・お・じ・で・も・ち・が・う」の合計 10 のひらがなに、とても親しむことができます。しかし、もしこの 10 のひらがなを「み、み、み」と言いながら合計 20 回練習するとしたらどうでしょう。楽しさという点では、この絵本を読むほうがずっといいと思います。しかも、「日本語の本が一冊読めた！」という達成感を得ることも出来ます。

こんな調子で G さんは、「よむよむ文庫」のレベル 1 の CD を自宅で何度も聞いたり、教室で読んだ絵本を持ち帰り自宅で何度も読んだりと、楽しみながら多読を続けて 1 年経ちました。今は、レベル 1 の本をゆっくり読むことができ、CD を文字を見ずに聞いておおまかなストーリーがわかるレベルに達しています。1 年間の成果としてはもちろんかなりゆっくりですが、何よりも、ストレスなく教室に通ってくる、日本語を続けたいという気持ちがますます大きくなっているという点で、日本語の教科書を勉強するよりはずっといい方法だと思います。

5）今後

日本語の実力に関わらず、「多読」は能動的、自発的な態度で日本語に触れ続けていける方法です。ただ、個人のレベル、好みの違いを適切に見極めないと、「面白くない」「難しすぎる」「漢字を覚えなきゃ」と思わせてしまいます。これからは、教室に来てくれる人たちをさらによく見たり話をしたりして、何を与えたらもっと楽しくなるか、興味が持続するかを考え、読み物を準備していきたいと思います。英語やドイツ語フランス語が得意なオランダ人は多いのですが、日本語はそれらの言葉とは全くちがう系統の言葉で、日本語を学習するというのは彼らにとって大きなチャレンジです。せっかくの大きなチャレンジが、「難しい。大変だ」という負担にならないよう、「また日本語の日だ！」と楽しみに通ってもらえるように、いつもリラックスできる場を提供したいと思っています。

（＊オランダ多読教室のブログ→http://plaza.rakuten.co.jp/nihongotadoku/）

＜実践報告⑤＞

多読が教えてくれたこと

NPO 法人日本語多読研究会、JET 日本語学校・粟野真紀子

JET 日本語学校の同僚が集まって結成した日本語多読研究会は、2002 年 1 月にレベル別読みものの制作を開始しました。そして、JET 日本語学校では、2003 年 4 月から選択授業で多読を取り入れて以来、何らかの形で 5 年間多読授業が続いています。

授業のやり方などについては前に触れましたし、他の先生方が詳しくお書きになっていますので、私は多読を通して私自身が学んだことについて書いてみようと思います。

◇多読が教えてくれたこと

●「教えない」

多読授業の紹介すると、「ただ本を読ませるだけで、教師は何をするのですか」とよく質問を受けます。「教師は静かな教室にじっとすわっているだけで、何も教えていないではないか」と。

確かに。しかし、その「教えないこと」こそが多読の最大のポイントではないかと思います。

わくわくどきどきしながら夢中になって日本語の本を読んでいる学習者は、頭の中で日本語を介してテキストと濃密なコミュニケーションを行っています。笑い声を立てたり、ときにはうっすら涙を浮かべたり。無意識に言葉を駆使し、身につけていっている貴重な時間です。なにも、その世界に教師が割り込んで、一方的に何かを教える必要はないのです。その流れを中断することは、かえって害になると思われます。

だからといって教師は何もしなくていいわけではありません。多読の目的は、やさしいものから始めて、徐々に難しいものへと大量にインプットしながら日本人向けの本を読めるようにすることですから、教師にはそれを支援していく重要な役割があります。これはけっして生やさしいことではありません。学習者一人一人の興味やレベルに応じて「読めるもの」を提供し、読み続けていける読み方の指導を臨機応変にしていかなければなりません。そのためには学生一人一人と関わり、よく観察することが必要です。

●「教える」から「支援」へ

それでは、「教えずに」どう「支援」していったらいいのでしょうか。

多読を始めたばかりの学習者の中には、やさしい本でも、知らない言葉に会うと戸惑って先へ進めず、すぐ辞書や教師に頼ろうとする人がいます。しかし、百パーセント解釈しなければ先へ進めないのでは、何年経っても一般の本への「離陸」は難しい。そんな学習者には、「とりあえず飛ばしてごらん。また出てくるから、そのうちわかるよ」「絵を見れば？」などと声をかけて先を促します。そのうちに、学習者は飛ばし読みができるようになり、内容に集中し、質問しなくなります。聞いてくるのは、どうしても気になる言葉が残ったときだけ。それには簡単に答えます。「先生、『切ない』って悲しい？心が痛いってこと？」「うん。そうだね。そんな

感じかな」。読むうち、言葉があいまいなもやもやから、やがてはっきりした輪郭を持ってくる、そんな体験をたくさんしてほしいと思います。読んでいる本が、ちっとも進んでいなければ、止めるよう促すのも大切な支援の一つです。

●「一人一人への支援」

こうして、一人一人をじっくり見ていると、今まで見落としていた学習者の能力にはっとさせられたり、反省させられることが多々あります。

他の授業では集中力が続かなくておしゃべりしたり、奇声を挙げるH君の場合。教師の指示に従えない。文法なんかどうでもいい。当然成績はよくないのですが、多読の時間は、どこにいるかわからないぐらい静かに2時間集中します。積み上げ式の勉強はできないけれど、自分の興味あるものなら、自然に読み飛ばし、言葉も身につけるのが早い。日本人の友達から聞く言葉は理屈なしに取り入れ、話すのは得意ですし、携帯メールのうまさ、速さと言ったらびっくりするほど。彼は多読的には「優等生」。ちゃんと自分が行きたい方向に行きながら学んでいます。

また、文法が苦手で、テストの点はいつも芳しくないのですが、ローマ帝国に興味があり、堺屋太一や塩野七生の本を次々と読むM君の場合。語彙が非常に豊富で、話すのも上手でしたが、中級の教科書の読解問題がいつもできません。「正解」を説明すれば、「ああ」とすぐわかるのですが。あとで、多読授業についてのアンケートをとったとき、「一番読みにくかったのは？」という問いに、「教科書」と答えました。理由は「だってつまんないんだもん」。

なるほど！誰でも、自分の興味がない文章を無理やり読むとき、内容のとらえ方はどこか虚ろで、目が泳いでしまうものです。それを彼は端的に言ったのです。

読むということももちろん能動的なコミュニケーション行為なのに、私は、多読授業以前はそれを無視して一方的に「教材」を押しつけていたわけです。

また、多読を通して、日本語学習を支援するという意識を強く持つようになったおかげで、常に自分を学習者の立場に置いて授業を振り返ることができるようになりました。「この間教えたばかりなのに、なぜ学生は覚えないんだろう」という嘆きは、今は、はっきりナンセンスだと思えます。自分だって英語を10年教わったけど、ちっとも身につかなかったではないか･･･。

●「勉強するな」

「教えない」ことは、学生に向けて言えば「勉強するな」ということです。

「面白くないけれど、勉強になるから我慢して読む」「わからない言葉は書き抜いて家で覚える」。多読ではそれらはすべてタブーです。それをしていると、楽しくたくさん読めないからです。

教師は教えないし、学習者は勉強してはいけない――何を言い出すのかと思われたかもしれません。この辺のことを一回でうまく説明できる自信はありません。ですから、この話はこの辺で終わりにして、次に多読授業を受けた学生たちの生の声をお聞きください。合わせて、言わんとすることを汲み取っていただけたら幸いです。

◇多読授業についての感想より抜粋（2004年4月～2007年3月　JET日本語学校）

①日本に来てから間もない頃は、日本語の本を読むのが本当に辛かったです。もともと本を読むのが好きなので、簡単な小説などは何度も読んでみようとしましたが、知らない言葉や漢字がたくさんあってなかなか進めなかったのです。それで金曜日の多読の時間は私にとってほんとうにつまらない時間でした。いくら面白いマンガだと言っても、早く進められなかったので、すぐにあきらめたりしました。でも、先生は、知らない言葉が出たら、飛ばして全体的な内容がわかったらそれで十分だと言いました。ほんとうにそれで大丈夫なのかと思いながら、そうやってみました。知らないうちに私はどんどん本を読むことに夢中になっていました。さらに、そんなに長く感じた多読の２時間があっと言う間に終わってしまったりしたのです。多読の授業はあらためて私に本を読む楽しさをくれました。たとえその本が日本語で書いてあってもかまわなくなったのです。これからも多読の時間を通じてもっと本を楽しみたいと思います。

②初めて授業を受け始めたときは、自分は上級だから、それに合う本だけを読まなければならないと思いました。授業時間、無理をして選んだ本は、知らないことばかりで単語や漢字を何回も調べながら読みました。さすが！先生のお言葉通りに本がつまらなくなったり、読みたくなくなったりしてむしろ読書が面倒なことのように思われてしまいました。

先生の勧めで、読み始めた本（注：日本語多読研究会作・レベル別読みもの）は、すごく読みやすくて面白かったのです。韓国でもあるような話もあったし、全然知らない日本文化の本などいろいろ・・・。このように自分に合った本を読んだ後は速読ができるようになりました。

でも、一番驚いたことは速読より理解能力の向上でした。前は本の内容を韓国語で理解してむりやり頭に入れて読むから速読ができなかったですが、先生の勧めてくれた本は、韓国語ではなく日本語そのままに理解することができるから前より速くて楽しく読めるようになりました。いつの間にかそういう読み方に慣れて授業時間がもっと楽しくなりました。

③去年、選択授業のとき、多読の授業について初めて耳にしたが、内心半信半疑でした。ただ本をたくさん読んだだけで、それが日本語の実力につながるかどうかはわからないし、別に自分が好きなとき、好きなところで読めばいいのに授業までそんなことをやる必要はないんじゃないかな～と思いました。でも、今年、実際、多読の授業をやってみてその考えは変わりました。いろんな本を読んでいるうちに自然に日本語の実力も伸びた気がします。なかなか本を読むのができなかった私にとって、まずいろいろな本を読める授業だったので、とてもありがたいと思います。授業でも電車の中でも夢中になって読む時間が多かったので、あっという間に34巻が山ほども積もっていてびっくりしました。好きな本しか読まなかった私にはいろいろなジャンルの本を読めたからとてもよかったと思います。

④多読の授業は心を和ませてくれる。授業中に音楽を聴いてもいい・・寝てもいい・・トイレに行ってもいい・・しばらく「ボー」としてもいい・・先生に自由に質問してもいい・・漫画を読んでもいい‥こんなにいい条件がたくさんある授業は世界でここしかないかもしれない。とても楽しい授業だった。前学期も日本事情の時間に多読をしたが、そのときはあまり楽しくなかった。でもいつの間にか、本当にいつの間にか楽しくなった。まだまだ読むのは難しいけれど、行間を読めた瞬間はすごく嬉しい。朝早い時間に多読の授業をするのがよかった。

⑤多読授業の前は、日本語の本をあまり読みませんでした。日本語があまり上手ではありませんでしたから、日本語の本がまだ読めないと思っていました。でも、多読授業に触れてから、本を読むことは想像より簡単だと分かりました。最初は、レベル別日本語多読ライブラリーという本を読みました。レベル１から読んで、とても楽でした。言葉と文法がよく分かりましたから、本当に嬉しかったです。

今は、日本語を読むことに自信を持っています。本をよく読んだら、日本語に慣れると思いますから、本屋で興味がある本を探して、三国志と言う漫画を選びました。三国志の漫画は漢字も書いてあるし、平仮名も付いているし、三国の歴史は前よく読んだし、それで、一番読みやすいです。実は、デスクの前できちんと勉強することは嫌いなので、ほとんどしません。でも、日本語の本を読みながら、日本語を勉強することは、本当に楽です。（中略）日本語の本は完全に分かるとは言えませんが、いろいろな知識と面白い事が分かりますから、楽しいです。多読のいい習慣を続けます。ありがとうございました！！

⑥多読のおかげで、読めなかった本がどんどん読めるようになった。これが一つの窓で、日本という世界をみることができた。自分のレベルも分かってきた。先生と本について話をすることも普通の授業ではあまりないことだからうれしかった。赤瀬川原平という作家を知ったこともうれしい。

⑦僕は本当に良かったと思います。自分の足りない部分がわかってうれしかった。外国人が言葉や意味を全部わかるということは不可能だと思います。そのことがわかっていたにもかかわらず、自分は本の内容より言葉や意味に集中している自分を見ました。それで読むのが遅いのだということに気付きました。ポイントがわかったら分からない言葉や意味も推測することができました。この授業をうけて自分の日本語の実力と改善しなければならないことを発見してよかったと思います。これからも同じような時間があったらいいと思います。

⑧私はこの授業を受けて１年になる。４月、ピンク色（レベル別読みもの、レベル１）の易しい本から始め、エッセイ、小説などさまざまな本を読むようになった。国で私は別に本が嫌い

ではなかったが、なかなか読まなかった。しかし、日本に来て本が好きになって、今は本は私の友達と言えるほどだ。

９月までは、さくらももこのエッセイにはまって９冊も読んだ。さくらももこの絵もあるし、内容も面白くてすらすら読んだ。10 月になってもさくらももこの作品を読んでいた。しかし、日本事情の小説の授業で使う「博士が愛した数式」という本を読んだ後、小説の面白さがわかった。その時、私は「ずっとエッセイばかり読んでいるより、小説にも挑戦してみよう」と思った。それで、江國香織や吉本ばななど韓国でも有名な作家の作品を読んでみた。そうしたら半年前にはきつくて内容も理解できなかった吉本ばななの小説がすらすら読めて自分でも驚いた。最近は、本屋や Book Off に寄って「次は何を読もうかな」と迷いながら本を買うことが好きで、家にはまだ読んでいない本でいっぱいだ。韓国に帰って全部読むつもりだ。

⑨この授業を受けてもう１年間たちました。初めて「この２時間で静かに本を自由に読んでください」と聞いて、ビックリしました。なんで学費を払ったのにたった１人で本を読むの？

でも、先生が言った通りにして、本当に日本語が上手になったと実感しました。昔話の本だけじゃなくて、漫画とか現代恋愛小説も読みます。いろんな語彙とか、教科書の中で勉強できない言葉を覚えました。もし、授業で小説とか読まなかったら、自分で家にいっさい読みません。この授業のおかげで日本語の小説を読む恐さを克服しました。日本語の小説を読むのが好きになった。帰国する前に、いっぱい小説を買いました。読むことが大好きです。

⑩日本へ留学に来た前に、日本の雑誌とか文化についての本を読んだこともあるけど、そして、日本の小説は、芥川龍之介の「羅生門」とか、森鴎外の「高瀬舟」とかも読んだことがあるけれども、常に翻訳書をそばにおいて、分からなかったとき、中国語を見た。

今の授業中、もちろん翻訳本がないから、日本語の本を読むことを訓練して、そして、先生から、簡単な本（JGR）を紹介してもらって読み始めた。だんだん自信を持って、レベルがもっと高い本を読んできた。そして、今は自分の好きな漫画も読める。その中で一番好きなのは「NANA」という漫画。台湾で中国語のを読んだから、今日本語で読んでも意味は大体分かる。時々もっと面白い感じがある。原文だから、訳文じゃなくて本来の言葉は一番面白いと思う。

⑪「多読」は私が日本語を勉強し始めて以来、初めて受ける授業だ。もともと私は読書が大好きなので、この授業は本当に役立った。この２時間の授業を経て本を読むスピードは上がった。特に、どんなテーマの本を読んでもかまわないという点は、とてもいい。読書の好みは人それぞれで、普段本を読まない人にはマンガを読ませ、そしてだんだん読書の習慣がつくように授業をして、本当にいい発想と思う。

（＊JET 日本語学校での多読授業のブログ→http://blog.canpan.info/nihongo-tadoku/）

座談会「多読授業について話そう！」

日本語学校や在住外国人への日本語学習支援として多読授業を実践している当研究会のメンバーが、同会員で英語多読提唱者の酒井邦秀さんを囲んで、多読を始めるきっかけや実際の多読授業の効果、学習者の様子などについて話し合いました。以下、酒井邦秀（S）、松田緑（M）、川本かず子（K）、宮島京子（J）、粟野真紀子（A）

●「多読」授業のきっかけ

A　まず、酒井先生が多読授業を始めた経緯をお聞かせください。

S　長年、大学で TIME や Newsweek を読ませる「普通の」授業をやってきたんですが、学生の英語力は伸びないと感じていました。やさしいものをたくさん読まなければだめだと思って一橋大学ではやさしい本を読ませたり、貸し出したりしましたが、それでもペーパーバックが読めるようになった学生はほとんどいなかった。僕も、授業中に本を読ませるということはできないと思っていたし、考えなかったんです。

ところが、たまたま、2000 年の春、電通大で「新人セミナー」といって、1 年生 8 人が僕の授業を受けることになった。そこで何をやってもいいと言われたんで、思い切って、長い間やりたかった「教師は何にもしない。やさしい本だけたくさん積んで勝手に読みなさい」っていう授業をやった。テーブルの上に本をまとめて置いといて、で、好きに読んでいいよって。グレイディッド・リーダー（graded readers=レベル別読みもの）ですよ。90 分授業なんで、最初 30 分読んでもらって、次の 30 分、僕が英語の蘊蓄の話をして。で、最後 30 分また読んでもらうという。

M　楽しそう・・・

S　僕の話って、けっこう面白いんですよ。特に蘊蓄の話なんてのは、かなり面白い話なんだけど、すぐに気がついたのはね、最初の 30 分間、みんなシーンと読んでいるんですよ。で、僕の話になると、とたんに眠そうになる。これは、いかん、僕がしゃべるよりも学生は、読んでいる方がずっとずっと真剣。で、僕は、その真ん中の話をやめて、ちょうど 45 分のところでお茶を入れて配って（笑）。夏休み前まで 13 回授業があったんですが、彼らは 90 分ずっと読み続けた。そしたら、8 人のうち 2 人が、その授業が終わってから「本を貸してください」と言ってきた。そして、1 年間ずっといろんな本を借りに来て、ついに 1 年間の一番最後に、大人向けのペーパーバック

を借りて読むようになったんです。

一同　はあ〜。

S　そういう授業があって本当にラッキーだった。そして、それがものすごくうまくいったわけですよね。8人のうち2人がペーパーバック読むようになっちゃったんだから。それでも必修授業で多読をやろうと思わなかった。

次の年には夜間の授業を担当しました。一番初めの授業の時に、BBCのサイトからダウンロードした科学記事を配って説明したんだけれど、そしたら、その授業の一番最後にね、もう30歳くらいの女子学生が来て「今日の先生の話なんにもわかりませんでした」って。

一同　（笑）

A　難しいですよねえ。それは。

M　でも、それを言うのはずいぶん勇気がありますね。

J　恩人ですね。

S　恩人ですよ！それはもう本当に感謝しています。僕は「ごめん」って言ってね。その次の授業の時に、その前の「新人セミナー」で読ませたやさしいのを持って行って、50人ぐらいいたんだけど、その中で「あの、皆さんね、これからクラス、2つに分けます。で、片方は、ここに絵本ややさしい本があるから読んでてください。で、片方は最初の時間と同じようにBBCの科学番組のサイトからダウンロードした物を渡して、普通に読んで訳すっていう授業やります」って。そうしたら24人、ちょうど半分くらい多読のほうへ移ったんです。で、その人たちはほっときっぱなし。半分は普通に読んで訳す授業。そしたら、どう考えても1年経ったらそのほっといた方が、英語にたくさん触れてるの。こっちでやってるのは、みんな先生にやらされてるわけだから、指名されたときしかこっち向いていない。で、これはもうだめだって思って1年後から訳す授業はなしにした。

● 「大前提」

M　それまでは、私たちがイメージする大学の英語の先生の授業をしてらしたんですか？

S　そうです、そうです。

A　私たちも同じような経緯を辿ったわけです。「普通の」読解授業では学生の力が伸びていく実感が全然なかった。教師が説明しただけではだめで、言葉は、もっとわかる文脈を読む中で少しずつ身についていくんだろうとは思っていたけど、でも、読もうにも日本語にはレベルに応じて読める本がない。それで、JET（JET日本語学校）の同僚に声かけてみたら、みんながわっと集まってくれて、2002年1月からレベル別読みもの作りが始まったわけ。

J　まず、作るところから始めなければならなかったっていうわけですね。でも、だから作ろうって普通は思わないと思うけど（笑）。

M　私も日本語学校の読解授業で「キッチン」をやったときも、みんなつまらなそうにしていて、少しずつ読ませて、「これはどういう意味ですか？」って聞くと、予習してきた子は答えて、予習してこなければ「わかりません」「誰かわかりますか？」って言うと誰か答えて。9割の人がつまらなそうにして、1割の吉本ばななのファンです、みたいな人だけが生き生きしていて、何か、その読解の授業って何なんだろう？って。

A　そうそう。学生は、初級の授業をやった

だけでは中級の文章読めないから、１個ずつ文のパーツを説明してあげて。こうなってるんだよっていうのが積み重なれば、今度どこかで出会った文もそれを使って読めるようになるに違いないという。

S　大前提！

A　大前提が教師の中にあったんですよね。だけど、そんな作業やってもなかなか生の文が読めるようにならない。っていうのは、自分を学習者の立場に置き換えてみれば、容易にわかることなのに。精読をいくらたくさんやってもだめ。学生時代、自分も精読して英文和訳をせっせとやったけど、いっこうに英語の本は読めるようにならなかった。そのやり方じゃだめだと、もっと早く気がつけばいいのに・・・。

J　そのやり方に誰も何も疑問を持っていないから。

S　できないのは本人の努力が足りないからだって思ってるから。

A　で、教師になったら、また同じことをやらせてる。

S　僕も 20 年以上それをやってました。

● 初めての日本語多読授業

A　2002 年に読みもの作りを初めて、1 年ちょっとで昔話などの読みものを 20 ぐらい作った。で、そろそろできるかなと思って 2003 年４月に JET 日本語学校の選択授業で多読を初めてやってみた。本が少ないから、図書館で児童書を借りてきたり、学生に、自分で読みたい本を持ってきなさいって言って。週 1 回、2 時間を 5 回。何とかみんな好きな漫画や児童書を持ってきて読んでいた。それから半年後、２回目の選択授業で多読をやって５週終わった後に、学生が「もっと続けたい」って言ってきたの。初級終わってすぐの「勉強があまりできない」と思われているクラスの学生が多かったんだけど。で、漫画貸してあげたら、ずっと黙々と読んで。

J　授業の外で？

A　選択授業は 5 回で終わりなので、その後は、研究会のメンバーの仲間が交代で監督してくれてずっと続けたわけ。そこに他のクラスの子なんかも集まってきた。グループ毎のテーブルにして、そこにぼんぼんぼんと本を置いて、黙ってしーんとみんな読むわけ。やさしい本がそんなにあるわけじゃなかったから、読みたい本を読むという感じで。

　で、その次の年から中上級のクラス授業の中で本格的に始めたのね。2004 年の 4 月から半年。そうしたら、ほんとにし〜〜んとして、すごかった。口が挟めないぐらい集中して読んだ。私たちの作った読みものもあるけど、これ以上の力があると思うから好きな本を読んでいいって言ったら、漫画とか、みんなが・・・まだねえ、段ボール 1 個に詰めて持っていけるぐらいの本しか用意できなかったんだけど。それを、私が、朝早く行って教室に置いて、それで 1、2 時間目は

2003 年冬　初期の頃の多読風景（JET）

別のクラスへ行くの。それで、3、4時間目にそのクラスにぱっと入ると、全員がもうすでに本を手にとってしーんと読んでる。休み時間にもだれも立たない。いまだかつてそういうクラスはないというぐらい。授業以外の日にも入れ替わり立ち替わり、講師室に続きを借りに来るという状態。

Ｊ　それは、週に１回？2時間？

Ａ　１回２時間。学生は 17 人ぐらい。最初は学生の反応がすごく気になって、１ヶ月経ったところで感想を聞いたりアンケートとったりして、すごく慎重に進めたのね。それが、半年の授業が終わった後に感想を書いてもらったら、ものすごくいい感想文がいっぱい出てきたんです。でも、それを読むと「最初のうちはなんだろうと思った」っていうの、やっぱり多かった。「私は本が読めないのにいきなり本、読めって言われて、この授業は無理だと思いました」とか「嫌だと思いました」とか「飛ばして読むのでは言葉が覚えられないから不安だった」とか。だけど、「いつの間にか本に夢中になって読めるようになっていた」「よかった」というのをほとんどみんな書いてくれた。

それから、2006 年度まで中級から上級のクラスで多読をやって、だんだん私も学生からいろいろなことを学んできた。他の授業ではあまり勉強ができると思われていない学生が、実は多読的な読み方はとっても上手だったり、逆に文法のテストの点がいい学生が、漫画一冊を一か月かかっても読めなかったり。学生がどんなふうに読んでいるかわかってきた。「読む」という行為は単純に文法や語彙理解じゃないってことを学生から教わった。

宮島さんの多読授業のきっかけは、「月刊日本語」で JET の多読授業の記事を読んだってことでしたよね。

Ｊ　そうですね。去年（2007 年）の春。学校（アジア学生文化協会）から選択科目で何か読む関係のものをっていう話があって。そのとき、「『月刊日本語』に多読の記事が出てたよ」って同僚が教えてくれた。で、読んで、その前の秋にアスクから「よむよむ文庫」が出たときに、「すごくいい本が出たな、どこかで使ってみたい」とは思ってたんで、「あ、この本を作った方たちが、この授業をやってるんだ」って、つながった。

Ｓ　わあ、美しい話ですねえ！

Ｊ　それで選択科目でそれをやってみようって思ったんですね。まだ多読って何だか全然わかっていない。ただ、本読むだけじゃないと思ったんで、連休前に粟野先生にメール送ったら、先生がすぐにメールを返してくれて、ぴゅんぴゅんと何往復もして（笑）。で、あっという間に JET の授業を見学をするという話になって・・・。あの時、先生が私が送ったメールに返事してくれなかったら、多分持ってる「よむよむ文庫」だけでちょっとやってすぐ終わったと思う。で、授業を見学させてもらったのがやっぱり大きかったですね。

左から酒井、川本、宮島、松田

やさしいものから読むと聞いていても、そこまでやさしいものから読むとは思っていなかったし、声をかけている様子とか、みんなが夢中になって読むのを見たのが。

Ａ　その前までの「読む授業」って、一つのものをみんなで読む授業だったんですか。

Ｊ　結局、個々で読むっていう発想はなかったから。でも、たくさん読んだり聞いたりしなさいとは言っていた。できるだけたくさんの日本語を脳に通すことがないと、授業だけでは全然うまくならないんだよって。今になって思えば、私が勧めていたことは「多読多聴」ってことだと思うんだけど。学校の普通の勉強っていうのは、自分では満足するけど、実は言葉って、そういう意識的な勉強の中でだけじゃなくて、無意識のところでできあがってくる部分が大きいですよね。でも、言うだけでは学生は読まない。私は、具体的な方法を教えないで、ただ読みなさい、聞きなさいって一生懸命言ってたんです。

● レベル別読みものの意義

Ａ　そう、そう、それは言うんですよね。教師はね。

Ｊ　結局、じゃあ、その方法が何だったかっていうと、ああ、多読なんだと今は思います。

Ａ　実際に授業やってみて、どうでしたか？

Ｊ　隅のほうに椅子もってって、壁のほう見てこうやって熱中して読んでる子なんか見てうれしかったですね。

Ｓ　そうですね、そうですねえ。

Ｊ　それで、本を読んでいるときに、完全に本の中に入り込んでいる真空状態みたいな感じを作らないと意味がないんだって思ったんですね。辞書引いたり、母語に翻訳したり、理屈で理解しようとすると「真空」が破れるからいけないんだって。多読授業をやってみて実感できました。教師の役目は、どうやったら真空状態をうまく作れるかなんですよね。

Ａ　宮島さんにその「真空」を体験してもらいたくて、英語多読してみたら？って水を向けたけど、最初、あまり興味なさそうでしたよね。でも、また３ヶ月ぐらい経って「やってみませんか」って言ったら「やります！」って言ったのね。あれっと思って・・・。

Ｓ　何があったんですか（笑）どうして・・・？

Ｊ　日本語多読をやるためには、英語多読をやったほうがいいと、まじめに考えて、紀伊國屋（書店）に行って背表紙を見たんだけど、何を選んでいいのかわからくて気が重かったんです。最初に読んだ本は本当にぼんやりとしかわからなかった。で、去年の８月５日の勉強会で、英語多読のワークショップがあって、とても簡単な英語の本（Oxford Reading Tree シリーズ）を見て「ほう」と思った。それからですね。あそこで見ていなかったらやろうと思わなかったと思う。あの本が、多読の入口としてあまりにもいいので、あれを見ただけで、なるほどって思うんですよ。

Ａ　やっぱり読めっていうだけじゃ、学習者はどうしていいかわからない。やさしい本を用意して導入してあげる必要があるってことですね。

　ドラマ好きで「たった一つの恋」に感動して、だからそのノベライズを「ようし、読むぞ」って買った学生がいるんですよ。ところが、読んでみると全然わかんなくて、それが初めての本だったけどもう１ページで終わったっていう・・・。

レベル別読みもの全 60 作

J　大体、みんな挫折の経験がありますよね。

S　英語でも、同じ。

A　あと、「ああ、かわいそう」って思ったのは「火垂の墓」ね。アニメ見て、泣いて大感動して、で、原作を買って・・・。

M　うわぁ、原作を買っちゃったのね（笑）。

J　それは、ショック受けるでしょう（笑）。

S　「よむよむ文庫」の存在意義が、非常にはっきりしますね。

K　翻訳しないでそのまま考えずに読めるものがあるっていうその気楽さっていうのかしら、リラックスして読めるっていうのは、大きいと思うんですよ。

● 「読むのが怖くなくなった！」

M　粟野さん、JET でやってて、学生が伸びたって思うことっていうのは、何？

A　学生の実感ということで言うと、「飛ばし読みを覚えて良かった」と言いますね。「全部わからなくていい、どんどん飛ばしなさい」というのは、他の授業ではあまり言われないことだと思う。それから、「読むのが速くなった」とか「漢字が読めるようになった」とか、これは多読のおかげって言う。

M　「多文化共生センター東京」でフィリピンのママさんたちとやっている多読授業の効果は、はっきり言えます。つまり「読める」ようになるわけです。

A　日本語は耳から入って知っているけど、読み書きがゼロの人が初めて活字を本を読むんですものね。

K　それまで何も読んだことがないわけですから。

S　電通大もそれに近いです。英語の本を読むなんてことは、もう、いっさい考えたこともないし、あり得ないと思っていた人たちだから。

M　ああ。近いですね。むしろ、日本語学校の学生よりも。日本語学校の学生は、日本語を勉強するっていう目的で日本にいて、毎日それをしているから。

A　そうですね。それでも元日本語教師という学生が言ってた。「2 年間大学で日本語教育専門にやって、塾でも勉強して、それから教師になったけれど、その間本は読まなかった。でも、JET に来たら、たった 2、3 ヶ月の間にもうこんなに本を読んだ」って。ほっといても読むからって言っても・・・。

K　読まない。

S　読まないと思います。

K　特に日本語は３つの文字がありますよね。だから怖いんですって。

M　さっき言った、タイやフィリピンのママたちは日本語が書いてあると、もう意識的に見ないようにして。私たちにはわからないものだと思っていたのが、このクラスに来てから怖くなくなったって。

S　街角の看板が読めるようになるわけですよね。それは、感激だな。

K　日本語学校でも、日本語の本っていうの

は、怖くて手に取れなかったって、言う学生いますね。

● 飛ばしていても、言葉は覚える？

Ａ　多読のルールに「わからない言葉は飛ばせ」っていうのがある。でも、学生の中には、「飛ばしていたら、いつまでたっても覚えられない」っていう学生がいる。多読に疑問を持っている学生を納得させるようないい例がありますか。

Ｓ　たくさん観察していると、ええとね、バイリンガルの漫画ってあるんです。日本語と英語と両方書いてある。「ドラえもん」とかいろいろあるんですけど、中学１年生で、英語は無視して日本語のほうしか読まない子がいた。ところが、ある時、グレイディッド・リーダーのレベル１を手に取ったら読めてしまった。だから、日本語を読みながらも英語がちらっと見えていて、その「ちら」が意味があるんだと思います。

Ｍ　じゃあ、ルビだけをどんどんどんどん読んでいて、そのうち、ちらっと見えていた漢字のほうも・・・。

Ｓ　多分ね。

Ｋ　私は目に入ってると思う。タイの学生が、ある時ずっとルビ読んで、だんだん読んでいくうちに、読めない漢字でも意味がわかってくる。形見ると。それがすごく面白いって言ってくれた。

Ｓ　松田さん、ご自身はどうですか？英語多読をやって語彙は増えたと思いますか？

Ｍ　増えたと思います。何回も出てくる基礎語は確実に増えた。

Ｓ　宮島さんは？

Ｊ　語彙が増えたっていう意識は全くないです。でも、読めるもののレベルが上がったという事実があるんです。

Ｋ　増えたって、どういう感覚？

Ｍ　最初わからなかったものが、いくつかはわかるようになったってはっきりわかる。

Ａ　じゃ、漢字も最初は目に入れず、ルビだけ見ているんだけど、そのうちわかるようになる？

Ｋ　なると思う。でもルビも大量に読まないと。漢字は総ルビでいろんなものが読めるといいと思うんですけど、ルビ付きの読みものが少ないし、やさしい読みものは全部ひらがな。日本語は多読に向く本が少ない！もっと、作らなくちゃ・・・。

Ｍ　新聞でもなんでも、総ルビになっていればいいんですけどねえ。

Ｋ　非漢字圏の人には、日本語を読むのは、とてもとても遠い遠いみちのりで・・。

Ａ　レベル１とか２をた・い・りょ・う～に読み込む。しかも短いぶつぶつじゃなくて、長編を。

Ｓ　いいね。それ絶対必要。大人はやっぱり長いものも読みたい。やってみよう！ものすごくやさしい言葉だけで書いてある何十ページもある読みもの。100 ページとか 150 ページとかの。面白そうだな。すばらしいな。

Ｍ　それから、「こんなことやっていて大丈夫なんだろうか」って思う学習者に、これだけ伸びたと確認させるには、どうしたらいいですか？

Ｓ　ええとねえ、いちばん簡単なのは前読んで難しかったのをもう１回読んでもらうの。少し読めたら、少し前に読んだものを読んでみる。そうすると、前すらっと読めたつもり

でも、今度は深く読めたり速く読めたり楽しめたりする。ちょっと戻ってみるっていうのが一番簡単なチェックの仕方だろうと思う。

M　日本語多読でも、そのまんまできますね。自分に自覚させてあげるっていうのはね。

J　それから、多読を成功させるには、教師を信頼してくれてるかどうかっていうのが、多分大きいと思うんですよ。

A　それはありますよね。

J　私が、本当に一生懸命、これはこういう意味でやりたいと思っていると説明すること。それがないとできない。

● 声をかけるタイミング

S　皆さんに意見聞きたいけど、指導しない方がいいんですかね？僕、ちょっともう、わかんない。今、すごく揺れてるんですよ。僕は一人一人細かく指導するんだけど、授業中、ただ読めっていうだけで、どんどん読んでうまくいっている例もある。

J　私は声がかけられない。こちらが思っていることにまだ自信が持てないでいるから。もっとたくさんやったらそれができるのかなあと、思う。

明らかに、学生が我慢して読んでたら声かけるし、もっとこのぐらい本のほうが、って持っていったりはするんですけど、細かくは声かけない。あと、こういう本を読んでる自分が好きだから読んでるみたいな学生をどうしたらいいかと・・・。

一同　ああ、いる、いる、いる！

J　どうしても周りを意識する人っていうのはいますよね。そういうの全然関係なく、自分と本と１対１になれる人もいるけど、先生の目とか周りの目とか気にする人がいる。とっても「勉強」ができて、勉強勉強って意識の強い人って、自分なりに分析して、これは勉強になるだろうって本を選んだり、そういう計算をして読んだり。そういう人は、回数を重ねるうちに、自分でそういうものから脱皮していくのかなあ・・・。

A　５回ぐらいの選択授業だとそのまま終わっちゃいますね。

J　去年の学生で、こんな人がいたんです。学習型の絵本を読んでたんですけど、親向けに「お母様へ」っていう文章がページの下の方にあるんですね。数行ですけど、そこはずごく難しい。でも、彼女は、必ずその「お母様へ」まで読む（笑）。そこを読むことが自分にとってとても役に立つんだ、と。それは、もう全く多読に反していることなので、「そこは読まなくていいんだよ」って言うんだけど、後書きから前書きから目次から全部読むことが勉強だと思っている。その子は成績もいいし、だから「私にとっての勉強になる」っていう理性で読んでいる。

A　徐々に気がつかせるしかないかな。この前、ある学生が「これ、先生、僕にはまだ無理です」っていって本を途中でやめたんですが、そんな話をみんなに向かってしてあげるとか。「途中でやめて偉いね」って褒める。「読めてすごいね」だと、勉強ごころをあおるので、「やめてすばらしいね」とほめて、面白さを追求することが大切なんだってわからせていくとか。

M　大人には巧妙に読めるふりをする人がいる。それで「どうですか？」って言うと、「あ、面白かったです」って言う。だけど、やっぱり何回か見ていると「読めてないな」ってい

うのがわかります。難しすぎるものを読んでいるときだけは、声かけは必要かもしれない。

A　私は、その様子からわからない子もいたのね。最初の時、観察眼がなかったんだと思うんだけど、あとでわかったの。すごく日本語ができる子だった。漫画の「ワンピース」が好きだって言うから、「じゃあ、読んでみる」って言って勧めたら読んでるふうに見えたんですよ。で私が「どう？」って声かけるたびに「う～ん、難しいけど、ま、だいたいわかる」とか言う。少しずつ進んでるからいいなと思ってたんだけど、後で感想文を見たら、最初すごく大変だったんだって。「多読はつまらない時間でした」って書いてたの。でもね、知らないうちに、ほんとにいつってわからないんだけど、ぐんぐんわかるようになってね。7月31日、学校のスピーチ大会なんですよ。みんなが、スピーチコンテストの会場に行って聞くんだけど、その子はね、漫画忍ばせてきたの、休憩時間に読むために。それで、司会の先生に怒られたの。「漫画やめなさい！」

一同　（笑）

A　それぐらい夢中になったの。夏休み前の最後の日ね。「やった！」って思った。

M　でも、日本語学校の場合には、他の授業をたくさん受けているでしょう。だから、最初すごく苦しくても、どっかの地点でほかの授業の勉強の内容の方が定着してくるとか、発酵してくるとかで、追いついたってことも言えるんじゃないのかしら。

A　う～ん。そうかもしれない。でも、語彙や語法を勉強しても飛ばし読みなんかのコツは体得できない。多読でそれを体得したから、他で習った語彙や何かが生きた、とも言えると思う。それから、選択じゃなくて、カリキュラムに多読が組み込まれているということは、期間を約束されていることなのね。５回の選択授業だと、何にも変化がないうちに終わっちゃう人は、「なんか、つまんなかったなあ」って、次、戻って来ない。だけど、必ずそこで読まなきゃいけない時間を保証してもらえると、4 か月目ぐらいに、芽を吹くみたいな・・・。

M　そうすると、難しくても「やめなさい」って言わない方がいいこともあるのかな？

A　やっぱり、目が止まっている人には「やめなさい」って言った方がいいと思う。だけど、難しいけど、興味があって読みたい気持ちのほうが強くて、やめたほうがストレスっていうような人が、そのうち読むコツを掴んでくるってことはある。最近は、難しくても読みたい学生には、やさしい本と難しい本の二本立てで読んでもらったりしてます。

●　多読のルールは何のため？

J　「辞書を引かない」っていうルールは、学生は抵抗ないですね。

A　ええ、抵抗ない。すぐに捨てますね。飛ばし読みする方が負担になるようなタイプの子が、ちょこっと引くことはある。

K　でも、本に夢中になると、たいてい面倒くさくなってね。

A　メモする学生も、すぐメモをとらなくなる。だから、もう、最初からあんまり「メモするな」とか厳しく言わないで、メモしてるのはさせておいて「あの、メモどうした？」と後で聞く。たいてい「やめました」と言う。

J　いつの勉強会だったか、「どうしてメモを取ってはいけないのか？」とか「辞書を引く

のは何回までなんですか？」という質問が出たときに、すごくびっくりしました。多読の大前提がわかっていたら出ない質問だと思って。辞書を引いてはいけないっていうのも、無理矢理禁止じゃないんですよね。引いてもいいんだけど、引きすぎるとそれはさっき言った「真空」を壊してしまう。だからいけない。4 原則っていうのは、全部「真空」を守るためのものなのに。

S　そこが、なかなかわかってもらえないんですよ。

A　要するに大量に楽しく読むような流れを作るってことを常に思っていればいいんですよね。それに照らして原則は適当にアレンジしてくれていいわけ。ある学生が辞書を引いていても３回目ぐらいでやめていれば、なんにも言わなくていい。

M　根本のところでわかっていないと、多読を始めても、結局「読解」にしちゃう人もいるかもね。

S　英語でもありますよ。一番すごいのはね。御三家と言われる名門女子校のどこかで、多読がいいってことで多読を始めた。それが、年間 10 冊のグレイディッド・リーダーを全訳させるんですって！

一同　ええーっ！

S　つまりね。今までの読解と同じのをたくさんやれば多読だと・・・。

一同　ああーっ！

S　普通は、多読っていったら、精読をたくさんやることと思われているんですよ。教科書よりも１レベルやさしいものを、例えば夏休みに全員に買わせて読ませて、夏休み明けにテストをするっていうのがよくあるやり方。

K　「読」じゃなくて「勉」。「多勉」。

J　自分が一生の中で一番たくさん本を読んだのって、中学時代だと思うんですけど、一生懸命、図書館へ行って借りてきては、例えば土曜日、夢中で読んでいて、気がつくと暗くなっていた、みたいな読書ってありますよね。多読って、そういう、本の中に自分がすっぽり入ってしまうような読書を目指すってことなんですよね。それは、辞書引きながらの読解とは、全然違う。

S　そういうのが一番身になるんだよね。

A　そこら辺を理解してほしいんだけど、わかっちゃうと簡単なようで、意外に通じないものなんだなあって思いが・・・。

K　１回話したぐらいじゃ、なかなかわかんないのよ。やっぱり、授業見学に来てほしい。

●　「活字嫌い」は音から

K　中にはどうしても活字はダメっていう学生がいて、寝ちゃうのね。何持ってっても、ダメな子はダメ。そういう子をどうしたらいいか・・・。

A　でも、そういう学生も日本語を学びに来ているんだから、何かしら伸びたいとは思っていると思うのね。だから、活字嫌いの子はテレビ見るとかそういうインプットで補えていればいいなと思うんですけど。

K　レベル別読みもののようなアニメとかドラマがない。せいぜいが、宮崎駿のアニメぐらいで。そこまでのやさしいものがない。ゆくゆくはやさしいものからレベル別に音も集めたい。

S　今ね、僕の授業でＤＶＤを使おうとしているんですよ。「ミッフィー」とか「ポコヨ」っていうクレイアニメとか。ところどころしか

セリフが出てこない保育園の初めぐらいの人たちが見るものです。学生の中には「字」じゃなくて「音」の人がいるんですよ。音のほうが強くてね。字のほうはっていう。今までは学校教育っていうのは必ず字が大事で、最終的に試験って字だから、それで常に忘れ去られてきた人たちみたいな人が・・・。

M　字の人が勝ってきたと思います。

S　そう、そう、そう。多読ではうまくいかなかった人たちが多聴、音のほうから入ることができないかなって。しかもそこに絵がついてたらね、かなりの人がうまい具合に音と言葉が結びついて、それから文字に入っていくということも可能ではないか、と。その「ミッフィー」や「ポコヨ」の日本語吹き替え版があれば日本語でも使えるかも。音は非常に望みがあると思いますね。

●多読を始める条件

K　酒井先生が多読をおやりにならなかったら、いまでも、私たち・・・。

M　何か変だなあと思いながら、「わかりますか」とか言って読解を・・・

K　変だと思いながら、短編いくつかコピーして配って、好きなの読みなさいっていう程度にしていた・・・、そんなもんだったような気がする。

A　どんな教育機関でも、多読をぜひ取り入れてみてほしいですね。ただし、本の確保や管理や問題がありますが。宮島さんは、本はどうしていますか?

J　それは自分が本買うのが好きだから、自分でたくさん買ってしまった。

A　だけど、他の先生に多読授業を勧めるときに、みんながそれはできませんよね。

J　図書館の本っていうのも運んでくるだけで大変。時間があっても・・・、肩が凝る(笑)。

A　だけどやっぱり毎回教室に違う本が出てるといいですよね。いつも同じ本があって、どれにしようって仕方なく選ぶ感じよりも、「えっ！これっ！どういう本だろう？」って、前向きな気持ちって。でも、予算的にもねえ。

J　学校でも買ってもらっていて、多読授業の学生にだけは貸し出しをしているんですが。

A　授業で読むだけではなくて、貸し出しはぜひできるようにしたいですね。読む量が違ってくるから。

S　もし、多読をやってみようと思ったら、まず、ささやかに始めてみたら、と思います。有志を集めて読書サークルを作ってみるとか選択授業でやってみるとか。本を大量に用意したり、管理するのは大変なことですから、少しずつ。

　また、周囲の理解を得ていくのも大切なことです。多読を学校全体が理解してやるのとそうじゃないのとでは全然違うから。

A　そうですね。本揃えとかカリキュラムとか、多読ができる環境が整ってないとうまくいきませんよね。だから、みなさんに多読の勉強会とか英語多読の体験講座なんかに出てきていただいて、理解を深めていただけるとうれしいんですが。

　今日は、みなさん、ありがとうございました。(2008年6月14日　電通大にて)

NPO 法人日本語多読研究会
http://www.nihongo-yomu.jp/